

**【記念講演】****棚卸資産会計・付加価値会計・  
三井大元方勘定目録・環境会計の研究**

－これまでの私の研究の道程をたどって－

中原章吉（松蔭大学）

**I はじめに**

2006年4月に創立された松蔭大学大学院経営管理研究科に会計学関係科目の専任教授として参加した。

私は、2001年3月に駒澤大学経済学部・大学院商学研究科修士課程・博士後期課程を定年になる前に1年を残して、教授を辞任して名誉教授になった。と同時に嘉悦大学の教授になった。

駒澤大学に35年在籍して辞任するときに、最終講義という行事をやった。駒澤大学など多くの旧制大学で行われてきたことである。

大講堂を使って、ゼミの在學生・卒業生・同僚・知人・友人等関係者が聴講に来てくれて、大講堂も一杯になった。講義をしながら恩師や、かつて教わった教授の最終講義を思い出していた。講義がすむと拍手と花束で両手一杯になったのを思い出す。

**II 棚卸資産会計論**

私は、大学院を出て就職した大学で、研究活動の柱としたのは、「棚卸資産会計」であった。これは、私の修士論文のテーマが「棚卸資産評価損の性格」を一橋大学教授の飯野利夫教授のもとで、やっていたから、その影響で引き続き棚卸資産会計を研究していたのである。

ただ、棚卸資産会計は、そのときすでに番場嘉一郎教授などの大著などもあり、かなり研究がすすんでいる分野であっただけに、新しい一歩をふみだすのがむずかしいという独創的研究作品をつくりあげていくのがむずかしいすということもあった。

広島に3年いて東京にもどったときにも専任講師であったが、研究テーマについては、まだまだ迷っていた。人間社会により近づける研究テーマ、その意識は学部頃から持っていたが、そこでたどりついたのが「付加価値」を中心にすえた会計であった。しかも、日本には

---

キーワード；棚卸資産会計、付加価値会計、三井大元方勘定目録、環境会計

日本に地についた会計アプローチが重要なのではないかと考えていたことから、その頃まだ日本では会計の分野であまり行われていなかった「実態調査」しかも大企業を対象とするアプローチにたどりついた。

### Ⅲ 付加価値会計論

企業付加価値会計の調査研究は、まだ広島に在住していた頃から、福山市の主に各種の制服を作っていた縫製業を対象に行った。文部省（現在の文部科学省）科学研究費の予算をもらって福山市の中小企業である縫製業の付加価値会計を手がけたのが、私が付加価値会計の調査研究に手を染めたはじめてであった。この研究については、東京の駒澤大学への転任後も続いたが、東京の縫製業も対象に加えたのは、地理的条件も加わったことによる。付加価値会計の研究の対象企業を中小企業から大企業（上場企業）に移していったのもこの地理的条件もあったが、企業そのものの付加価値会計に対する認識・理解の程度にも関係があった。中小企業の場合、付加価値会計の調査・研究は、付加価値会計そのものの啓蒙活動から始める必要があり、その数が著しく多かったことにもよる。当時の調査手段にはパソコンなどの機器がなく、調査能率やスピードが今日と比較にならないほど低かったことにもよる。当時の上場企業は、今日と比較して少なかったが、アンケート調査の回答率は、他の分野の調査と比べてかなりよかったときいている。

こうして、付加価値会計に関する実態調査は、我が国ばかりでなく、イギリス・ドイツ・フランスなどの西ヨーロッパ諸国そしてアメリカ合衆国ばかりでなく、東南アジア諸国、オセアニア諸国にまでひろがった。ただ、我が国以外の諸外国については、企業そのものを調査対象とせず、それぞれの国の付加価値会計に関する主要な研究者に対して調査を行った。

また、イギリス、ドイツなどの企業調査資料の比較的そろっている国の資料は、それをそのまま使うことにした。

付加価値会計について、世界的にみて当時もっとも盛んに研究され、研究者も多く、制度的にも整備されていたイギリスには今までに4回、在外研究として滞在し研究活動をした。いずれも活動に便利なロンドンに居をかまえて、1982年に1年間、1987年に半年間、1997年に3ヵ月間、2006年に2週間イギリスの付加価値会計を研究するとともに、付加価値会計の研究者が、新しい研究分野としての環境会計に移っているのをみせられた。

### Ⅳ 三井大元方勘定目録の研究

駒澤大学から転任した転任先の嘉悦大学が西武新宿線沿線にあり、その途中の新井薬師駅の近くに三井文庫がある。そのことで三井家の会計の研究を再開しようと考えた。三井大元方勘

定目録の研究は駒澤大学の専任講師の頃から手がけてきたテーマでもあったし、断続的にもつながってきた研究テーマでもあった。

また、会計史研究という点から、駒澤大学在任の頃より温めていたテーマに「奥州本間家帖合の法」があり、その序説としてとりあげてみたのが「奥州本間家帖合の法 序説」である。

## V 環境会計論

駒澤大学から嘉悦大学に転任してまもなくして、学長の推薦をもらい、石油会社の構成する財団から奨励金をもらって、『環境会計制度の国際比較と分析』というテーマの共同研究をはじめた。一応期間は2年間になっていたが、まだ文献としてはまとまっていない。環境問題については、世界的なひろがりをもった研究も必要とされる。

環境会計については、駒澤大学在籍中に、会計以外の多分野の研究者も含めて研究会を作成して活動を行っていた。私は参加しなかったが、『環境マネジメントハンドブック』が石崎、勝山、川口、村井などの諸教授によって発表されている。

1997年の夏に3ヵ月ばかりイギリスのロンドンに駒澤大学在外研究員としてわたった頃は、付加価値会計研究の世界の中心地の様相のあったイギリスでは、環境会計研究がそれにとってかわっていた。

環境会計については、スコットランドの大学のある研究室を中心として、研究活動は全国的にひろがっているような状況であった。従って、出来るだけその研究者の研究室をたずねて、ディベートをするというような方法で調べていった。

あれほど盛んに行われていた付加価値会計がほとんど低迷になってしまった理由は、政治的なもの、ということ以外きわめて不明確なものであった。

勅許管理会計士協会の幹部の親しくしてくれていたCOX氏も、最初と2回目の訪英のときには付加価値会計の研究に大いに助力してくれていたが、その1997年の訪英のときには、“在郷軍人病”とかよばれる、よく理解できないような原因でなくなって、手がかりもなくなっていた。従って、そのときの訪英では、イギリスの環境会計の資料集めに終始することになった。

その後、私の教え子の付加価値研究者がイギリスに在外研究に往ったときにも同じような状況であったときくので、環境会計に付加価値会計は、とってかわられた状況であると考えられる。

駒澤大学から嘉悦大学に転任した2001年以降もこの傾向は、我が国でも圧倒的なものとなっていた。

付加価値会計研究者を中心として創立された「社会関連会計学会」における状況も同じようなものとなっていた。

嘉悦大学に転任した年の翌年に私は、嘉悦大学の「社会関連会計学会」の会員3人で東日本

部会を開催すべく企画して、成立した。

嘉悦大学での研究発表が社会関連会計学会の中で、必ずしも全部、環境会計そのものの研究発表とはならなかったが、中心課題はそれに近いものとなったと考える。

## VI

平成18年(2006年)4月をもって松蔭大学大学院の専任教授となった。私が大学の教員となって、研究活動に従事するようになって、棚卸資産会計から始まって付加価値会計、三井大元方勘定目録、環境会計という流れは、まだまだ完成されたといえるようなものはない。この間、「会計教育」そのものの研究に集中したこともあったが、その研究への道は、先がみえてこない。一步一步これからも進んでいこうと考えている。

### 〈要約〉

私の大学における研究活動が、広島の高島商科大学(現在の広島修道大学)、駒澤大学、嘉悦大学そして松蔭大学でどのように行われてきたか行われているか、主にその研究活動を中心に考察した。